

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論 文 題 目 Cultural Translation and Representation of Mother-Daughter Relationships: A Study of Works by Maxine Hong Kingston, Amy Tan, Fae Myenne Ng, and Mei Ng  
(文化翻訳と母娘関係の表象について:マキシーン・ホン・キングストン、エミィ・タン、フェイ・ミエン・イン、メイ・インの作品研究)

氏 名 藤井 爽

## 論 文 内 容 の 要 旨

中国系アメリカ人女性作家の作品における母娘関係は、マキシーン・ホン・キングストンとエミィ・タンのそれぞれのデビュー作、『チャイナタウンの女武者』(1976)と『ジョイ・ラック・クラブ』(1989)により、幅広く知られる中国系アメリカ人女性作家の作品におけるテーマの一つとなった。母娘関係はチャイナタウンの様なコミュニティにおいて文化的な遺産を次の世代に受け渡す役割も果たしており、社会を構成する家族関係にとどまらない。しかし、これまでの中国系アメリカ人女性作家の作品における母娘関係は、フェミニスト的な読みの中で評価されることが多かった。そうした読みの中で母娘関係は家父長的社会における女性の自律性を育む女性独自の関係と読まれることが多い。しかしタイガー・ママと呼ばれる子供の教育に熱心な中国人移民の母親像や、それに反抗する娘像などがアメリカで広く知られるようになった今日、中国系アメリカ人女性作家の作品における母娘関係は限定的に読まれ、再生産される中で自然化していき、固定化されてきているともいえる。しかし母娘関係が社会を構成する家族関係の一端であるならば、この女性独自の関係は更に大きな文脈で読むこともできるのではないだろうか。女性の自律性を育む人間関係や物語の設定にとどまらず、様々なことを言い表すために使われるモチーフとして読むことも可能なのではないだろうか。本論文では4作の小説に描かれる母娘関係を分析する中で、モチーフとしての母娘関係の可能性を論じ、更に中国からの移民の母親とアメリカ育ちの娘という世代間に加え文化的に違う考えを持つ両者の歴史的、文化的に特殊な関係性に焦点を当て、単純な言語翻訳にとどまらない文化的翻訳をもう一つの大きなテーマとして全体を論じていく。扱う小説は前述の中国系アメリカ人女性作家を扱う際に外せないキングストンとエミィ・タンの作品に加え、新しい世代のフェイ・ミエン・インの『骨』(1993)とメイ・インの『イーティング・チャイニーズ・フード・ネイキッド』(1998)である。後者2つの作品について、『骨』は特に批評家の評価が高い作品であり、キングストンとタンとの作風の違いを明確にした点で価値があり、メイ・インの作品はそれまで中国系アメリカ人女

性作家の作品では取り上げられることの少なかったセクシュアリティとクィア的な要素を扱っており、興味深いために選んだ。1章では具体的な分析に入る前に作品の母娘関係を取り巻く様々な問題を一覧し、後に続く議論の基礎とし、2章からは前述の作品を紹介順に論じ、6章では結論として、モチーフとしての母娘関係と文化翻訳の読みの可能性について論じる。

1章ではまず中国系アメリカ人女性作家に頻繁に向けられる批判について考察した。キングストンやタンはデビュー作の発表から現在に至るまで、小説内で中国文化を極端に野蛮に描き歪曲し、白人に迎合した筋書きを書き続けていると批判を浴び続けている。こうした議論は中国人や中国系アメリカ人のステレオタイプを再生産しているという妥当な批判である一方、あるべき中国や中国人、または中国文化のあり方を押しつけ個人の語りを否定する面もある。あるべき姿とはステレオタイプの別の形でもあり、作家たちはそうした中国系アメリカ人を揶揄するような表象を覆そうとしてきたはずであり、こうした批判はその試みをくじくことになりかねないといえる。

特にキングストンの作品が批判の矢面に立つのは、この作品がアメリカの文壇で大きく取り上げられ高評価を得たことが大きく関係している。それまでの回顧録的な小説とは違い、キングストンの作品は複数の語り手や母親の語りや伝説を取り入れた手法など、詩的で実験的であり、それゆえアメリカ文学界にとって衝撃であった。特に力強い母親像や彼女の語りは当時母親の声を求めているフェミニストの格好の研究対象となった。

ここでヴァージニア・ウルフの考察とアードリエヌ・リッチの宣言に始まる西洋の文学作品における母娘関係の表象研究の歴史をたどった。彼女の宣言は文学研究にとどまらず社会における母娘関係の再考など幅広い影響を持ち、中でもマリアンヌ・ハーシュのギリシャ神話から始まる網羅的な文学研究は母娘関係の表象研究におけるもう一つの金字塔となった。母と娘の両者の語りの可能性をほのめかしたこの研究書が出た同年、タンの母と娘の独白からなるデビュー作が発表され、すぐさまベストセラーとなった。母親の語りの認知と母娘関係の再発見は、世代を超えた女性全体の権利を求めてきたフェミニズムの動きをなぞっているともいえる。

中国系アメリカ人女性作家の作品内の母娘関係が、これまでの西洋の小説と同じ枠組みで論じることができないのは、母娘の差異が世代のみにとどまらないためである。母の教えは単に古臭く感じられるだけでなく、家庭やチャイナタウンの外では通用しない文化的な差異を含んでいるため、娘は困惑し母の教えやそれを体現する中国的なものに反抗する。二つの文化の中で生きる娘は頻繁にこの差異に直面し、その度に選択をして差異に対処していかなければならない。中国の文化をアメリカ社会の文脈で再解釈していくこの行為は翻訳に似ているといえる。主人公の彼女たちは常に翻訳的行為をしているわけではないが、両親の通訳として、母親の中国語で語られた話を英語で語る時に加えて、中国的な考えとアメリカ的な考えの取捨選択をするとき、彼女たちの語りは翻訳的であり、総合的にみると4つの作品は翻訳的であるといえる。

この主人公たちの翻訳的な語りは作者自身の置かれた状況に対する作家としての姿勢にも影響を与えているのではないだろうか。母親などの他者の語りを取り入れ、中国文化をアメリカの読者に向けて紹介しながら、小説作家としてそれらを自分の物語にしていかなければならない彼女たちは、小説の中で母親の語りの中から自分の声を見つけていかなければならない主人公とよく似ている。作家としての彼女たちは、民族的、文化的、歴史的な事実に加え、母親の語りを単に伝えるのではない作家としての物語を語る声を見つけなければならぬ。翻訳的な語りはアメリカ社会における主人公たちの生き残りの手段であるとともに、作家にとっての芸術性を求める表現方法でもあるといえる。

翻訳的な語りは更に文化翻訳という大きな枠組みでとらえることができ、本論ではそれをもう一つのテーマとして扱う。ホミ・バーバの議論における政治的な歪みを明らかにする文化翻訳は、むしろ翻訳に失敗した時にその効果を最大限に発揮する。なぜなら翻訳の失敗は両者の差異を明らかにし、スムーズに行われる翻訳の先にあるマイノリティの語りの主流文化への吸収を阻むからである。それゆえ翻訳の審美的な側面を強調するような議論はむしろ文化翻訳で明らかにされる翻訳の政治的な側面を隠してしまう。これは第三世界の文化を理想化し第三世界の抱える問題の根源を覆い隠すポストコロニアル理論の落とし穴にも共通する考え方であり、翻訳を論ずる際には翻訳者の置かれている歴史的、文化的、経済的な立場を審美的な観点で覆い隠すような読みには注意をすべきである。

もう一つ母娘関係に関する問題はチャイナタウンに代表される政治的な要因で作られた歴史的かつ文化的な場所である。チャイナタウンや家庭は主人公の娘たちの主体を形成する上で重要な役割を担っており、その文化的、心理的な影響は無視できない。中国文化はそのまま伝わるだけでなく、時に強化されアメリカ社会に合った形に変化もしているが、それに加えチャイナタウンはアメリカ文化の中で偏見を持って表象されてきた。共同体内の特殊な文化は住民を育むと同時に束縛をするため、そこを離れるときは、外部の偏見と向き合うことに加えて、物理的のみならず心理的にも離れなければならない、その方法もそれぞれの主人公で異なっている。更にチャイナタウンなどの特殊な場所における母親の立場や意味についても考察し、具体的な小説の分析に入った。

2章ではこれまで肯定的な評価を下されることが多かったキングストンの作品において、主人公がチャイナタウンとアメリカ社会の間で、どちらにおいてもモデルとなる女性像を見つけれない中で、不安と希望のないまぜになった沈鬱な状態に陥る様子を分析した。彼女の状態が良いのか悪いのかという観点ではなく、こうした不安を描きだしたという点で価値がある作品であるという評価をした。3章ではこれまで自らオリエンタリズムを描いた白人に迎合する作品だと非難されることの多かったタンの作品における、非常に政治的な問題、中国人であることの意味を問う問題がどのように解決されるのかを分析した。ヒロインの一人の娘は自分にとっての中国人である母親との思い出を振り返りながら、亡くなった母親の喪失に向き合うが、その過程で彼女は母親に対する意識と自分自身に対する意識を変えていく。その意識には中国系アメリカ人であることも含まれている。主人公の一人の娘は中国人であることを非常に個人的な家族の問題だと捉えているといえるが、これをもってして作品が白人社会に迎合しているとは言えない。なぜなら母娘関係という個人的かつ社会的関係の中から答えを導き出した彼女にとって、中国人であることは政治的である一方、個人的な記憶に結びついていいるからである。4章では『骨』の主人公レイラが暗い記憶であふれるチャイナタウンに住む母と外に住む恋人との間で揺れながらも、過去の記憶を解きほぐしながら記憶に向き合い、外に出る心構えをしていく様子を分析した。先の2作品と同様、娘は母親の別の面を再発見していく中で、母親を置き去りにする罪悪感から解放され、自分を形作った場所の一つとしてチャイナタウンを認めることで葛藤に折り合いを付けていく。5章ではメイ・インの『イーティング・チャイニーズ・フード・ネイキッド』を扱い母娘関係の中のセクシュアリティに関する問題を探った。主人公のルビーは母親に同性愛的な欲望を抱いているが、それは彼女自身が持つ同性愛への欲望が娘としての母親への愛という形で表現されたものである。親子の愛は自分を犠牲にした母親を置き去りにしたという、中国系アメリカ人の子供が持ちやすい罪悪感を基にしている。親への愛と性愛を同一視する彼女の態度は病理的な傾向として捉えられ、母親への罪悪感と折り合いを付ける筋書きの中では、そうした読みは彼女の同性愛的欲望を消去する傾向にある。それに対し本論

では彼女が食という文化習慣とセクシュアリティを並置する語りの中で、どちらも実は文化的に分類されたものにすぎないとほのめかしていることに注目した。彼女にとっては親子の愛も性愛も同じ愛であり、彼女はどちらも気兼ねなく行える場所を探しているのである。小説のタイトルは、従来の読みのように小説の中の出来事ではなく、自分の人種的・民族的なアイデンティティとセクシュアリティに対して心地よい状態でいられる未来を暗示していると結論付けた。

結論である6章では2章から5章を振り返り、まず各小説における母娘関係が、それぞれに違う意味合いを持っていることをまとめ、本論文の一つの目的である従来女性同士の連帯として読まれることの多かった母娘関係をモチーフとして読みなおすことをした。キングストンの母娘関係は相反する意味合いの文化遺産を娘が母から受け継ぐ複雑な空間になっており、タンの小説においては娘が自身のアイデンティティを記憶を通して再構築する場となっている。インの『骨』でも同じように母娘関係は自身について再確認する機会を与えるが、同時に母親に依存する危険性も明確にしている。メイ・インの小説における母娘関係はセクシュアリティの分類が人為的に構築されたものであることを明らかにする役割を果たしている。こうしたヒロインの変化は、本論文のもう一つの大きなテーマである翻訳的な語りの中で行われている。彼女たちの語りは言語や文化における翻訳が決して完璧にはなされないことを明らかにしており、批評家が翻訳を審美的な観点より倫理的に読むことへの変遷を促しているとも言える。彼女たちの語りを文化的・歴史的な背景から読むことは、第三世界や少数者の文化を理想化することで彼らの抱える現実的な問題を矮小化する動きから離れることを意味するからである。最後に中国系アメリカ人女性作家の翻訳的な語りの意味について考察し、その芸術性と将来性に触れて結論とした。